中国語教育について考える

――変わるもの・変わらないもの

丸尾　誠

一　はじめに

コロナ禍の状況において人々の生活様式が一変した。大学においては学生が登校できなくなることに伴い授業形態を急遽変更する必要に迫られ、とりわけ新学期開講直前の二〇二〇年の三月は連日、専用システムの使用方法の研修が行われるなど現場は混乱した。筆者は中国語文法を専門としつつ、大学で中国語を教えている。加えて、時期を同じくしてそれから二年の間に「中国語教育学会会長」および「NHKラジオ講座講師」といった複数の立場から中国語教育に携わってきた。以下、それぞれの立場から感じたことを踏まえて、この間における中国語教育の実情と将来像について述べてみたい。

二　「教員」としての立場から

㈠　名古屋大学のカリキュラム

筆者の勤務する名古屋大学では、英語以外の外国語は全学授業の一環として一、二年生が学ぶ必修科目の一つとなっている。その外国語とはドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、朝鮮・韓国語、中国語（「初修外国語」などと称される）の六つの中から選択することとなる。私が本学に赴任した一九九八年当初は一年生は全学部が週二回、二年生は文系は週二回、理系は（一部の学部を

除いて）週一回が必修となっていた。その後は各種事情によるコマ減を経て、理系・文系ともに一年生は年間を通して週二回、二年生は文系のみ週一回というスタイルが確立された。そして二〇二二年度からは全学的な教育カリキュラム改革が行われ、専門科目に鑑みた各学部の意向を反映した結果、初修外国語の授業数はさらに減少する結果となった。例えば工学部、医学部などは従来は前後期を通してのべ四コマ中国語を学んでいたのが、現在は一年の後期にのべ二コマ学ぶだけとなった。私自身も含めて、中国語は最初は発音の説明や練習にそれなりの時間を割く教員も少なくないため、この半年という短い期間で何をどのように教えるかという問題を担当教員の間で共有し真剣に論じないと、いずれは学ぶ意義を問われて授業自体がなくなる可能性がより現実味を帯びてきたと言えよう。現在は必修科目となっている英語以外の外国語を履修している学生の間で、学ぶ意欲に温度差が見られる。語学の学習にはやはり目標が必要であり、検定試験について相談に来る学生などは、自主的に学んでくれるであろう。一方で、具体的な目標が見出せない者に対して「将来仕事で必要になるかもしれない」「今の時代、英語だけでは足りない」などと言ってもあまり説得力は感じられない。もちろん皆「単位を取得する」という切実な目的は有しているものの、せっかく学ぶのであるからには、私の場合は「中国語に興味を持ってもらいたい」という思いを抱いて授業を行っている。ただし、画期的な教授法を有しているわけではなく、「文法説明を分かりやすくする、なるほどと思ってもらう」「発音を重視する」「中国に関する話（いわゆる雑談）をところどころに入れる」といった試みを続けているくらいである。中国語を学んでいなければ、その分ほかのことを学べたわけであり、その意味で教員の側も中国語を教えられることを当然の権利だと見なすことなく、学生の希望（この場合は中国語を身につけることと考えたい）を最大限叶えられるよう教授法なども工夫していくべきであろう。今回の初修外国語カリキュラムでの新たな試みとして、「多言語習得基礎」という科目が開講されている。これまでは学生は自分が学ぼうとする外国語がどのような言語であるかも分からない状態で選択する必要に迫られていたのが、二〇二二年度より入学後、最初の半年は前述の六つの外国語および各国の文化に一通り触れてから履修する言語を決めるという方式がとられている。これは必ずしも当該言語の習得に重点を置くということではなく、様々な言語に触れることにより異文化に対する理解・寛容性を身につけるという趣旨に沿ったものである。経済学部、医学部、工学部など一部の学部がこの方式を採用する（そうした事情もあり、従来の一年次の四コマが二コマに減少する結果となった）。こうした新たな試みの導入時期にコロナ禍が重なる

ことになり、その学習効果に負の影響を及ぼさないことを願うばかりである。

以下では、二〇二〇～二〇二一年度の二年間、筆者が行ってきた本務校における中国語の授業の状況について言及する（以下「一年目」は「二〇二〇年度」を、「二年目」は「二〇二一年度」を指すこととする）。

㈡ 授業について

二〇二〇年、新学期開講直前の三月に授業で使用する大学のシステムの操作に関する講習を受けたものの、その備わっている便利な機能を使いこなすというレベルではなかった。授業で使用すると、今度は「どこを見ればいいのか」「課題の提出方法が分からない」といった学生からの申し出への対応に追われた。課題についても、操作の関係で期限を過ぎたものも認めざるを得ない状況もあった（学生は提出したものと思い込んでいたなど）。なによりも困ったのが、中国語表記をどうするかということであった。この段階でほとんどの学生は簡体字やピンインで入力した文書を添付ファイルで提出することが難しいため、私は手書きのものを写真で撮って送ってもらった。そうなると今度は画像の鮮明度の関係で、文字の判別に苦労した。その頃のことを思い起こすと、（私の技術不足もあり）悪循環の続く日々であった。以下、個別の状況を述べる。

【一年生クラス（一年目）】

まさに遠隔授業が始まって最初の学期であった。本務校では大学のシステムを使用することが義務づけられていた。機器に精通されている教員はすでにこの段階においてリアルタイムで配信するオンライン方式で授業を行っていたのであろうが、私はオンデマンド方式で行った。すなわち、こちらで準備した授業資料を学生が自身の都合にあわせて読みつつテキストを自習して、指定した期限内に課題を提出するという方式であった。ただし、通常の対面式であれば最初のほぼ一カ月は発音の練習に費やす時期であり、これをすべてこちらが作成した解説ファイルを読んで、あとは各自がテキストに付属する音源を聞くように指示するだけというのもあまり学習効果が上がらないだろうと思い、パワーポイントに私が発音した音声と説明を入れてオンデマンド教材とした。この半年間は正直「資料作成」「課題添削」「その講評および解説」をひたすら繰り返す日々であった。自分なりに苦労したにもかかわらず、学期末に実施される受講生による学生アンケートは、私が赴任して以来こんなに悪かったことはないというくらい低評価であった（後に開催された分野別ＦＤで、私と同様の教員が多かったようで少々「安堵」したことを覚えている）。

後期になると回によってはオンラインで授業を行ったものの、よく言われるように画面に向かってほとんど一人で

しゃべっているという状態であった。対面式の授業中に何か質問はないか学生に問いかけても大抵はなんの反応もない。しかしながら、「ありません」という無言の回答を皆の表情から読み取ることはできる。これが画面越しの無反応の場合だと、そうした反応を読み取ることができず、そもそも聞こえているのかと不安になってしまう。受講生とのやり取りにおいては、「マイクがミュートのままになっていて聞こえない」「発話のタイミングが双方あわない」「会話にところどころタイムラグが生じる」といった各種要因により、コミュニケーションが円滑にとれず、心理的なストレスを感じた。身体的には、長時間画面に向き合うことから、目への負担が大きかった。

【一年生クラス（二年目）】

二年目は教員の側で「遠隔」か「対面式」かを選べる方式だった。大部分の教員が前者を選択している中で、私は年間を通してすべてのクラスについて対面式で授業を行った（非常勤講師を務めている私立大学では対面式で指定されていた）。開講方式について学生の意向を尋ねたところ、遠隔授業を望む学生は各クラス一名か二名であった。中国語を直接学びたいという強い意欲の表れかと喜び勇んで理由を尋ねてみると、そのほとんどが「友達と会えるから」であった。

【二年生クラス（一年目）】

カリキュラムの関係で、私は後期において、中級に相当する二年生クラスを担当した。オンライン方式も考えたが、学生全員が受講可能という条件が整わず[1]、オンデマンド方式で行った。講読の授業であるものの、このクラスの指定テキストには本文の日本語訳が掲載されているので、その日本語訳を課題とすることはできなかった（もっともかなりの意訳であるがゆえに、原義を踏まえた「忠実な」日本語訳を課題とすることはできた）。私が作成した授業資料において各課で扱われている文法事項を一通り説明したのちに、その課の本文に関して、次のような課題を課していた。

本文の中国語を（テキスト巻末に示してある）日本語訳を参考にしながら自分で読んで、分からないあるいは難しく感じた箇所（およびその理由）を各人一つ挙げなさい。

実際に提出されたものを見るとこちらが思っていたほど、言及される箇所が重なってはいなかった。正直、こちらの当初の思惑としては、皆が難しいと感じる箇所はだいたい共通しており、それをまとめて解説という形で、システム内の特定のサイトにあげようという見込みであったが、指摘された箇所は多岐に及んだ。その結果、二十数名の受講生全員に個別の解説やコメントをつけてメールで回答する

こととなった。しかも、なかには「各人一つ挙げよ」という指定にもかかわらず、たくさん挙げる熱心な学生もいた（言うまでもなく、こちらからは指定違反だなどと指摘することはしなかった）。数名分は同じ回答を流用することができたものの、たとえ同じ箇所であっても、学生が分からない原因や難しいと感じる理由が異なっていることもあり、個別の回答が求められ、その対応にかなり時間を取られた。しかも途中でやめることもできず、半年間この方式が続いた。いま冷静になって考えると、そうした回答をまとめなおして全体に示せば全員で問題点を共有できたのだが、その当時はそこまでの余裕はなかった。そして学期末の授業アンケートでは「個別に対応したこと」に対して高く評価されていた。こうした点からも「個々の学生とのコミュニケーション」の重要性を改めて実感した次第である。

【二年生クラス（二年目）】

このクラスは対面式で行った。出席している学生によると、これまで一年でのべ四コマ、二年の前期で一コマ学んできたものの、大半は遠隔での授業だったという。発音の指導もオンラインで受けてきたということであったが、多くの受講者について、中国語の正しい発音が身についていなかった。このクラスは前年度と同様の区分で、先の**【二年生クラス（一年目）】**の箇所で述べたものと同じ教科書を使用する講読中心の授業であったが、このままの状態で授業を進めるには少々難があった。しかしながら一年次の四月のように発音に時間をかけるわけにはいかず、各回の授業の冒頭の一〇～一五分ほどを発音のやり直しに当てることにした。毎回扱うテーマを決めてそれに特化して説明および練習を行った。結論から言うと、半年後には発音が非常にうまくなった学生が散見された。これは決して私の教え方がよかったということではなく、学生の意欲が違った。なかには一週間自分なりに練習してきて、授業後にこれで正しいか確認に来る学生も複数名見られた（そり舌音を苦手にする者が多かった）。発音がうまい学生にはうまくできていない友達にもコツを教えるよう依頼するなどした際には、教える側も相手ができるようになっていくことに喜びを見出しているようであった。やはり一緒に学ぶ仲間の存在は必要だと思われる。ラジオ講座を聞くなどして一人で学んでいる方であっても、志を同じくする人たちのサイトに書き込んで交流するといったことも学習の励みとなるであろう。これに関連して、授業中に周りの者と組んで行うペアワークを望む学生もいたが、密の状態を極力避けるように心がけている状況で実現できなかった。そもそも大きな声を出しての発音練習ができないことに加え、私自身マスクをしていることから学生が私の唇の形を把握できずに戸惑っていた。こちらとしては透明の衝立越しに授業を行っているので、マスクを外して発音してみることも

できたものの、心情的にためらいがあり、その都度マスクを外して声を出さずに口の形のみを示すなどした。このクラスの学生はすでに一年半の間学んで基礎があったとは言え、ここまで急速に発音が上達していく過程を目の当たりにしたのは、中国語を教えて以来初めての経験であり、新鮮に感じ印象に残った。例年であれば、毎年秋に中国の協定大学との共催による学内の中国語スピーチコンテストが開催される。クラス全員に参加を呼びかけるとともに、ふだんから熱心に学習に取り組んでいる学生、または発音がうまい学生などに、このコンテストに出ないか個別に声掛けをしてきたものの、二〇二一年は開催されなかった。夏休みに上海の大学に行く短期留学も中断されており、学生の中国語学習継続の有力な動機づけとなりうるイベントが軒並み中止となることは残念極まりない。

三　「中国語教育学会会長」としての立場から

はじめにお断りしておくが、これは私が会長（任期は二〇二〇～二〇二一年度）として何か画期的なことを行ったということではなく、立場上、本学会全体の運営を見渡せる状況にあったということから、以下、言及する次第である。

中国語教育学会（http://www.jacle.org/）は二〇〇二年四月に設立された「日本で中国語教育に従事する者の相互連携と研究・実践の向上を目的とする」学会である（「」内は本学会ＨＰより）。会員数は五五〇人あまりである（二〇二二年五月時点）。年に一度全国大会を開催し、これとは別に研究会を年に数回、開催している。また、年に一度学会誌『中国語教育』を発行している。まず、コロナ禍において学会の運営方式で大きく変わったのは、その全国大会と研究会の開催方式であった。他の多くの学会と同様に対面式での実現が叶わず、オンライン方式となった。大きな収穫としては参加人数の増加ということが挙げられる。現地への移動がないため、距離的な制約から解放され、時間的な拘束もかなり緩くなった。全国大会および研究会の発表テーマの種別を大まかに分類すると次のようになる。

①日本人中国語学習者の生み出す誤用分析
②特定の語の用法や構文に関する分析
③当該の学習ツールや教授法を用いた場合の学習効果について

このほか授業実践報告も見られ、有益な教え方の提示に加えて、遠隔授業における機器の有効な利用法、ソフトなどの補助ツールの活用法といったテーマで報告して下さる方も少なくない。こうした方々は往々にしてオンライン授業に切り替わる前から、ＩＴ関連に精通されておられた。この種の報告やセミナーが行われる際には参加者も多く、ノウハウを蓄積することが学会全体の共有財産になっていく

ことを実感できる。

検討すべき個々の課題は少なくないものの、学会として継続的に問題意識をもって取り組むべき課題としては、以下のようなものが挙げられる。

④初級で何をどのように教えるか

⑤中級で何を教えるか

④について。初級文法で教える項目というのは各種教科書を見ても大方似通っている。ただし、教える順番については教科書の著者に一任されていることもあり、未修得の文法事項が例文などで使われていて戸惑うケースも少なくない。近年、中国語の授業コマ数が減少していく傾向にある状況下で、より重要・不可欠な事項を選定して教える必要に迫られている。しかもそれを効率よく着実にという高い壁が立ちはだかることになる。教員たる者、やはり学習者には色々学んでできるようになってほしいという思いが強いと言えよう。私自身について言えば教員になりたての頃、補助プリントなどを多用して、今思えばやや過剰といえるほど教えていた。あるベテランの先生から「教えすぎ」はよくないといった趣旨の話を聞いて以来、何を教えるかということは常に念頭に置くようにしている。例えば、副詞〝差点儿〟（もう少しで）の用法などを説明しようとすると、その後に続く動詞が「肯定形か否定形か」、さらにはその表す事態が「望ましいことか・望ましくないことか」といった要素の組み合わせが、意味の異同に関わっており、簡潔な解説で済むとは言い難い。それほどページ数のない初級テキストの文法事項としては出しにくいところかもしれない。文法学習の難点の一つとされている〝了〟の用法についても、個別の用法に言及することも必要だが、「いつ使わないか」という視点も必要であると聞いてなるほどと思った記憶がある。個別に学んだ事項を復習しつつ整理するという試みはこれまでも行ってきた。例えば「否定詞〝不〟と〝没(有)〟の使い分け」「数詞〝二〟と〝两〟の使い分け」「介詞、動詞、副詞〝在〟の用法」「否定を表す副詞〝没(有)〟と動詞〝没(有)〟の違い」などがこれに相当する。また「「できる」の意味の助動詞〝会、能、可以〟の使い分け」などにはテキストの構成上、必然的に言及することになる。後述の「ＮＨＫラジオ講座」のテキストを執筆した際には、時間の関係でかなりの分量を割愛せざるを得なかった。それでも従来のテキストより覚えるべき分量が多くなったようで、リスナーからいただいたコメントにもそのむね指摘が見られた。教科書についても私などは空白の部分がもったいなく感じ、なるべく紙面の空白をなくそうと努めてしまうものの、「学習者が記入するスペースが必要」「空白は心理的な圧迫感をなくすといった意味合いを有している」と教えてくれた出版社の方がいた。

⑤については、中級とはどの段階からのことを指すのかという明確な区切りがあるわけではない。筆者の本務校の例で言うと、二年生からが中級となり、講読の授業が主となる。毎年大量の学生が中国語を学びつつ、一年で終わってしまうのはシステム上仕方のないことだとしても、非常に遺憾である（この学習者数の大きな変動は毎年大量の初級テキストが出版されるのに比して、中級のテキストは相当少ないことにも反映されている）。一年生で学んだ後も、自主的に学ぶ意欲を抱き続けられるよう別途対策が必要となる。検定試験などが学習の目的の一つとはなるであろう。

四　「ＮＨＫラジオ講座講師」としての立場から

二〇二一年四月より同年九月までＮＨＫラジオ講座「まいにち中国語」の講師を務めた。続く一〇月から翌二〇二二年三月まではこの再放送であった。通常はこのように連続して放送した場合、前期に聞いたリスナーにとっては聞いたばかりの内容の重複となり、リスナーが減るのではと危惧されるものの、毎週金曜日の分を新たな内容に変更することで、四月からのリスナーには復習による知識の定着化・強化を意図して二回（すなわち一年を通して）聞いてもらうことを放送前より想定していた（詳細は後述）。

ラジオ講座の利点としては「学習の継続性」がまず第一に挙げられる。なかなか聞き続けることができずに、「自分は意志が弱い」と自責の念に駆られるという声を耳にすることもあるが、一旦、習慣化してしまえば、苦労は感じない。ただし、他の用件をこなしながら漫然と聞き流していたのでは望むべき結果が得られないことは多くの学習者が経験していることであろう。わずか一五分と言えども集中して学ぼうとすると、それなりの努力は求められる（大学の授業は九〇分なので途中で気分転換も兼ねて中国の文化・習慣・生活様式などに関する話をすることが少なくない。こういう話題のときのほうが学生の反応がよく、こちらとしては喜んでよいのか複雑な気持ちになる）。聞くところによると、毎年講師は変わるものの、やっている内容は同じではないかという声もあるようであるが、文法事項についても各人の説明の仕方は異なるのであり、それぞれの講師の特色が反映された内容を通して、多く存在するリピーターの方にとっても多角的に理解し得るという点で意味のあることだと考える。とりわけ開講後しばらく続く発音の説明などは、各講師ごとに独自の経験やコツをお持ちであろう。

私が担当した番組ではＮＨＫの担当チーフが色々と新機軸を打ち出す、企画力に富んだ方であった。これまでのような講師中心の進行ではなく、ＭＣとして声優の劉セイラ

氏と俳優の劉鐘徳氏を起用し、二人の持ち前の明るさを生かして従来のやや硬い論調からの脱却を目指した。テキストに付けられたサブタイトルは「楽しく！　本気で学ぶ中国語！」であった。

本講座では初級文法を体系的に学ぶことに主眼を置きつつ、発音の習得にも力を入れた。中国語を学ぶ際には通常、はじめの複数回にわたって個々の発音に加えて、四声、声調のつながり、変調の規則、さらにはピンインの綴りの規則など膨大な量の知識を集中的に学ぶことになる。こうした知識を完全に消化できないまま文法の習得に入ることもあり（アル化の規則などは最初に出てくるが、その段階で説明しても、当該の現象に対する実感がないものと思われる）、いつまでたっても正しい発音が身につかない者も少なくない。こうした状況に鑑み、大学の授業では毎回わずかな時間ではあるものの、発音の説明・練習用に確保している。ラジオ講座でも、折に触れて学べるよう特定のテーマを設けて『発音のツボ』という一つのコーナーとした。「有気音と無気音を交えた単語（例：pùbù 瀑布（滝））」「shi と si を交えた早口言葉（例：四是四…sì shì sì…（四は四である…））」「en と eng の違い（例：真正 zhēnzhèng（本当の））」などは教育上、これまでも広く用いられてきたものである。さらには、

①同一の声調が連続する三音節語（例：出租车 chūzūchē（タクシー）、俱乐部 jùlèbù（クラブ））

②左右に引いた唇と丸い唇の移り変わり（例：似乎 sìhū（〜のようである））

といった多様な角度からの練習を通して、学習者に少しでも中国語学習を楽しんでもらえるよう、出演者・スタッフ、皆で配慮して番組を制作してきた。

また戦略的なことには私は通じていないものの、担当の方の意向で番組の最後には出演者個人の趣味や体験談など雑談的な話題を毎週入れた。これは日本語で行われた。番組の性格を考えると中国語で行うという方法もあったが、出演者の人柄をリスナーに知ってもらうということから、初級者に配慮した結果である。一見すると語学学習には関係ないように思えるものの、これは本稿でキーワードとなっている「コミュニケーション」の一環であると言える。リスナーに我々出演者三人のことを知って身近に感じてもらい、学習意欲につなげてほしいという意図であった。ラジオという耳で捉える媒体を通しているがゆえに、出演者の個性を強調してイメージをより明確に捉えてほしいという試みであり、リスナーには概ね好意的に受け入れてもらえたようである。

くわえて、出演者とリスナーをつなぐ方策として、先に言及した再放送の際に毎週金曜日の分だけ『お悩みバスターズ』というコーナーに差し替えて新規に収録を行っ

た。これは四月からの放送の際に、学んだ内容に関する質問を寄せて下さるよう折に触れてリスナーに呼び掛け、半年経った再放送の際に回答する試みであった。メールで質問できるという気軽さもあり、大量の質問を送っていただいた。放送ではそのなかのほんの一部しか回答することができなかった点が遺憾であったが、このようにして相互の意思疎通を図っていたものと言える。送られてきた質問の一部（の要約）を以下、挙げておく。

③出演者のyuanのaの発音がときどき「エ」に聞こえるが「ア」ではないの？（講座では「ア」で教えた）（一〇月号）

④（ji, qi, xi とzi, ci, si の発音の区別は分かるとしたうえで）j, q, x とz, c, s という「子音」の発音の違いが分かりません。（一〇月号）

⑤中国人のネイティブの方々は、学校でピンインを学習しますか。（一二月号）

⑥自分の名前を紹介するとき〝我叫～〟と〝我是～〟のどちらを使うの？（一月号）

⑦（「彼女は母親に似ている。」の意味を表す）〝她长得很像她妈妈。〟と〝她很像她妈妈。〟は違うの？（二月号）

⑧〝一想到下周的考试头就疼。〟（来週の試験のことを考えると、頭が痛くなる。）とあるが、これは〝就头疼〟の語順とはならないの？（二月号）

実際には学習法の質問や悩みの相談なども見られたものの、やはり文法に関する質問が一番多かった。文法に限らず、発音、語彙そして文化・習慣など幅広く学習者の疑問に答えるような書籍は、これまでにも数冊発行されている。

(i)『中国語入門Q＆A101』相原茂ほか、大修館書店（一九八七年初版）

(ii)『中国語学習Q＆A101』相原茂ほか、大修館書店（一九九一年初版）

(iii)『中国語教室Q＆A101』相原茂ほか、大修館書店（二〇〇〇年初版）

(iv)『中国語学習Q＆A200』上野惠司ほか、アルク（二〇一三年初版）

(v)『あなたの疑問にこたえる 中国語百問百答』丁秀山、東方書店（一九八五年初版）

(vi)『中国語百問百答Ⅱ』丁秀山、東方書店（一九八八年初版）

(i)～(iii)は雑誌『中国語』に、(iv)は『中国語ジャーナル』などに連載されていた記事を集めた学習に有益な内容であるものの、雑誌の休刊に伴い、続巻は出ていない。やはり質問してもらえるというのは教師にとっては、次のような理由により、うれしいことではなかろうか。

⑨学習者が興味をもって熱心に取り組んでくれているこ

とが分かる。

⑩学習者にとってどこが理解しにくいのかを教師自身が知ることができる。

⑪その場では即答できない難問について、教師にとっても調べることにより勉強になる。

⑫生徒とコミュニケーションが図れる。

⑩に見られる「問題の共有」という点だが、学会発表などで発表者の報告を聞くことも興味深いが、それよりも往々にして、その後の質疑応答のほうが盛り上がり、考えさせられることが多い。

⑪に関して、私は文法を専門としているものの、初級を教えていて戸惑うことは少なくない。例えば、以前、授業で使用したテキストのスキットに次のような文があった。

(1) 你参加什么俱乐部了？［汪鴻祥主編 2017: 104］
（君、何のサークルに入ったの？）

指名された学生もこのように正確に訳していた。そして昨年度担当したクラスで使用したテキストには次のような文が出てきた（テキストの会話文は学校の話題が多いため、内容が似通ってしまうのは致し方ないことである）。

(2) 你参加了什么俱乐部？［楊凱栄・張麗群 2019: 56］

例(1)では文末に付いて事態の発生・変化を表す語気助詞の〝了〟が、(2)では動詞の後に付いて完了を表すアスペクト助詞〝了〟が用いられているという差は見られるが、その際に指名された学生もやはり例(1)と同じように(2)を「君、何のサークルに入ったの？」と訳した。単独で見るとこの訳も成り立つものの、ここでは文脈により「君、何のサークルに入ってるの？」と状態について尋ねるほうが適切であり、念のために別途確認した教授用資料でもそちらの訳が当てられていた。このようなアスペクト助詞〝了〟を用いて状態を表すという点は、初級ではあまり触れられない。例えば、

(3) 他们结婚了。

という例文など、学生は通常「彼らは結婚した。」と訳すことになり（もちろんそれも正解であるが）、「彼らは結婚している。」という状態義とはなかなか結び付かない。次の例も同様である。

(4) 他为什么生气了？
（彼はなんで怒ったの？／彼はなんで怒っているの？）

(5) 我的电脑坏了。
（私のパソコンが壊れた。／私のパソコンは壊れている。）

各例の表す状態義とは結果残存の意味であり、これを持続を表す〝着〟ではなく〝了〟を用いて表す発想を学習者は身につける必要がある。このことを今度は日本語の側から見ると、「道端に人が倒れている。駆け寄ってみると息を

していない。」といった状況では「死んでいる。」という状態で表現する。変化の過程を目にしていないので「死んだ。」とは言えないところである。これを初級で学んだ〝了〟の知識のみに基づいて中国語で〝死了。〟と表現するのは容易ではない（持続を表す助詞〝着〟を用いた〝×死着。〟では間違いとなる[2]）。初級段階では多く、存現文を学ぶ際に〝死〟という動詞が現れる。「存在・出現・消失」義の中で〝死〟は消失を表すケースの典型例として言及されることが少なくない。

(6) 村子里死了一头牛。
（村で牛が一頭死んだ。）

しかし、文頭の場所を変更して、

(7) 路边死了一头牛。

とした場合には「道端で牛が一頭死んでいる。」という状態（眼前の描写）を表す存在義となる点はあまり注目されない。そうなると話は〝了〟を用いて表される状態義にとどまらない。

(8) 我学习汉语。

初期の段階で中国語の基本語順はＳＶＯと説明する際に出てくる類の例であるが、これには通常「私は中国語を勉強する。」という訳が当てられる。たしかにこのように「意志」を表す意味でも正しいものの、「君は大学で何の外国語を学んでいるの？」（〝你在大学学习什么外语？〟）に対して例(8)のように回答するのであれば「私は中国語を勉強している。」という状態の意味で訳すことになる。反対に、日本人学習者は「勉強している」という日本語訳を見ると〝我在学习汉语。〟という中国語のみを結び付けていることはなかろうか。また、次の否定形でも状態義を表すことは可能である。

(9) 我不打工。
（私はアルバイトをしない。【意志】／私はアルバイトをしていない。【状態[3]】）

授業では多くの場合、単独で示された文を訳すという作業になるため、どうしても直訳調にせざるを得ない。もっともこうした用法を習得していなくても、次のような会話の形で示した場合には、教員の側が特に指摘せずとも、「より自然な表現」ということを意識して学生も状態の意味で訳すことになるため、こちらが過度に心配することではないかもしれない。

(10) 你在哪儿工作？――我在银行工作。
（あなたはどこで働いていますか？――銀行で働いています。）

話を戻して、中国語母語話者にとっては先ほどの〝你参加了什么俱乐部？〟が状態を表すことなど疑問にも思わないかもしれないが、日本人にとってどこが難しいのかといったことを把握するためには、テキスト作成時に日本人

教員の意見を聞くなどして注意を払う必要はあるだろう。こうした配慮は今後も必要であろうし、初級テキストが毎年大量に刊行されるがゆえに一層そのように感じる次第である。

五　おわりに

大学受験のための予備校講師の映像授業などは、首都圏に在住して直接授業を受けることのできる学生と地方で暮らす学生の環境の格差をなくすことに大いに貢献しており、かつその学習効果も大きい。ただし、そこには受験生の必死に理解しようとする強い動機づけが存在する。外国語学部在籍の中国語を専門とする学生に対しての講義なら同様の状況である可能性は高いものの、第二外国語で単に対面式授業の代替処置としてオンラインを使用しているという状況であれば、画期的な学習効果というものを引き出すのは容易ではない。例えば、オンラインでの会議は非常に効率がよい。従来長かった会議が確実に短くなった。進行役が出席者に意見を求めても大抵は何も反応がなく、そのまま異議なしとして淡々と議事が進んでいく。会議が短いのは歓迎すべきことであろうが、対面式の際はもっと意見は出ていたと思う。オンラインでの授業の場合も同様である。効率は非常によいのだが、それは雑談などがないことが主な要因の一つとして挙げられる。私など対面式の際はしょっちゅう話がそれる。学生の集中力が切れるであろうときを見計らって、気分転換も兼ねて中国人の習慣や中国の文化事情などについて折に触れて話題にしていることは本文中でも言及した。その根底には「中国語に興味を持ってもらいたい」という強い思いがある。とりわけ単に必修科目だからという理由で授業に出席している学生には、このような好奇心を中国語学習の動機づけにしてほしいと思っている。

オンラインでの学会や研究会の発表を聞く機会は少なくないものの、対面式のときほどその後の記憶に残っていないような気がする（私自身の問題であろうが）。臨場感が欠如しているためテレビを見ているような感覚で、自らも参加しているという当事者意識が希薄となっているのかもしれない。筆者の所属する複数の学会でも現在では紙のレジュメや予稿集は廃止され、電子版に移行した。以前であれば、当日配布されるレジュメの確保で苦労したものであったが、紙の予稿集があれば発表の前に目を通し、発表を聞きながらメモをとるということを行っていた。それがオンラインになってからは受け身的に聞いているのが主となっているように感じる。こうした状況に鑑み、オンラインの授業で、学生が同様の状況になっていないか危惧するものである。対面式の講演会や研究会に参加したときのこ

とを思い起こすと、そのときの内容、討論およびやり取りが会場の雰囲気とともに脳裏によみがえってくるのは私だけではないのではなかろうか。

どの科目もそうであろうが、とりわけ外国語については継続性が求められる学習意欲の有無、平たく言うと好き嫌いは、教わった教員の技量や教授法に左右されることが少なくない。さらには教員の人間としての魅力という要因による影響も大きいものと思われるが、「同じ空間」を共有できる対面式でないとそうした側面がなかなか生かされない。画面越しに会話をする場合、視線が合わないため、コミュニケーションが円滑に行われているという感じがしない。もっとも対面式の授業であっても全員マスクをしており、言っていることが聞き取りにくいなど、ある程度コミュニケーションは制限される。そして何よりも素顔が分からない。通常の授業ですら人数が多い、会う機会が週に一度しかないといった要因により、生徒の名前と顔を一致させるのが容易でないところに加えて、マスクの存在がそのことに一層拍車をかける。

以上、これまでのコロナ禍の状況を踏まえつつ、中国語教育に関する見解を述べた。最後に本稿の副題として掲げた「変わるもの・変わらないもの」に言及しておく。

まず、「変わるもの」としては「教える事項」や「教授法」などが考えられる。

①【教える事項】

第二外国語の授業コマ削減により教えられない文法事項が生じてくる。どこに重きを置くかという目標の設定にも関わってくる課題である。

②【教授法】

遠隔授業は様々なツールを駆使し、学生の自主的な学習の促進を可能とするものである。一方で、遠隔授業の体験を通して、従来当然の如く行ってきた対面式授業のメリットを再認識することとなった。今後、対面式に戻ったとしても、遠隔授業で使用したツールなどは学生への課題、自習といった目的で補助的に併用するなどして、より教育効果を高めることができる。

次に「変わらないもの」としては「コミュニケーション」や「動機づけの設定」が必要であることなどが挙げられよう。

③【(色々なレベルでの)コミュニケーション】

受講生は自分の話す中国語が母語話者に通じたときにやはり喜びを見出すものであり、コミュニケーション能力の習得を重視しているものと思われる。我々教員の側でも別の意味で個々の学生とのコミュニケーションに気を配る必要があると言える。対面式では学生の授業態度や反応の様子などから、その理解度を把握しつつ授業を進めることが

可能である。また教室では学生をほめたり励ましたりすることを心がけ、ともに学んでいくという姿勢で授業に臨んでいる。遠隔授業ではこうした雰囲気を共有できないことから生じるコミュニケーション不足を補う方策を日々模索している。

④【動機づけの設定】

留学は大きな学習動機となるものであり、コロナ禍において、海外渡航が叶わないとなると学習意欲に影響することは否定できない。自分の周りの状況で言うと、せっかく大学院に合格して入学した中国在住の学生が来日することができず、一年半の間ずっと中国からオンラインで授業に参加することになった。これが学部生の場合だと言語の習得が主目的となるため、この種の「留学」であれば現地に赴くのと効果の点で大きな差が生じる。こうした状況を改善するには、オンラインであっても、より少人数のクラスを設ける、チューターの制度を充実させるといった試みを通じて、個人レッスンに近づけて、学習者がより主体的に話す「アウトプット」の機会を増やすことが有効ではないかと考える。また逆にオンラインであるがゆえに、不安などからくる海外留学に対する心理的障壁が取り除かれるケースもあるかもしれない。そうした状況も念頭に置きつつ、相応のカリキュラムの充実が望まれる。

注

〈1〉 本稿執筆時点（二〇二二年度前期）では科目ごとに学内にアクセスポイントが設けられるなど、オンライン授業実施の環境は大きく改善されている。

〈2〉 静態義を表す存在文において、助詞〃着〃と〃了〃の置き換えが可能となる事象については、宋玉柱［1988］をはじめとする先行研究でも言及されてきた。

桌子上放着（／放了）一本书。

（机の上に本が一冊置いてある。）

この〃V了〃の形が成立するのは、「動作の完了が結果の残存をもたらす」という動態義から静態義への移行に基づくものと考えられる（任鷹［2000］ほか参照）。ただし、初級文法では通常、存在文でこの〃了〃がついた形は扱われない。

〈3〉 「〃不〃＋動作動詞」の形には通常「〜しない」の日本語訳が当てられるため、例えば「私は今、アルバイトをしていない。」という状態を学習者が中国語で〃我现在不打工。〃と表現することは必ずしも容易ではない。これを「していない」という日本語から、状態を否定する副詞〃没有〃を用いて〃我现在没有打工。〃と表現することも可能であるものの、その場合には両者がどう違うのかといった問題が生じる。

参考文献

〈中国語〉

任鷹　2000　「静態存在句中〝V了〟等于〝V着〟現象解析」『世界漢語教学』第一期、二八－三四頁

宋玉柱　1988　「存在句中動詞後辺的〝着〟和〝了〟」『語言研究論叢』第五輯、南開大学出版社、五七－六六頁

引用テキスト

汪鴻祥主編　2017　『大学生活　中国語基礎［改訂版］』白帝社

楊凱栄・張麗群　2019　『［スリム版］表現する中国語』白帝社